

PISA 型読解力から考える挿絵の活用法

桐生直代・東 茂美

Utilization of illustrations to think from PISA type reading comprehension

Naoyo KIRYU and Shigemi HIGASHI

PISA 型読解力から考える挿絵の活用法

桐生 直代*・東 茂美**

Utilization of illustrations to think from PISA type reading comprehension

Naoyo KIRYU and Shigemi HIGASHI

概要

大学入学者選抜テスト試行テストでは、「学力の三要素」を多面的・総合的に評価することを目指している。なかでも注目されているのが、国語の記述式問題である。平成29年度は、センター試験では例を見ない実用文を題材に、会話文や表・グラフなどの読み取りと記述が出題された。この新傾向の試験は、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）B問題、PISA 型読解力を意識したものである。そこで、全国学力テストB問題、PISA 型読解力で問われる「連続型テキスト」と「非連続型テキスト」を関連させて読むことを、文学教材における「文章」と「挿絵」に置き換えた。小説教材における文字テキストと絵画テキストの相関を読み取ることは、PISA 型読解力の「情報の取り出し」「解釈」、「熟考・評価」、「批評」に相当する。また、従来、国語科教育では「挿絵」を用いた読解指導が行われており、指導事案や効果についての報告が多々なされている。小稿では、短期大学で行った文学教育を例に、「挿絵」を用いた〈読み〉を、異なる教育課程のつながりを見据えた読解指導として提案をする。

キーワード：大学入学者選抜テスト PISA 型読解力 連続型テキスト 非連続型テキスト 文章（文字テキスト） 挿絵（絵画テキスト）

1 はじめに

約30年ぶりに改革される平成29年度大学入学者選抜テスト試行問題^(注1)では、「学力の三要素」を多面的・総合的に評価することを目指している。「学力の三要素」とは、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」のことである。いうなれば、身につけた知識を活用して問題を解決する力が問われているのである。

そのような中、とりわけ国語と数学の記述式問題に注目が集まった。たとえば、国語の第一問は、センター試験では例を見ない実用文が出題された。生徒会の部活動規約と規約についての生徒たちと先生の会話文、部活動に関する表やグラフなどの資料を題材に、50字以内、25字以内、80～120字以内で記述する問題である。

また、第二問は評論文の読解であったが、2つの表と5つの図（うち4つが写真）を含む文章であり、図表と文章全体の関連を踏まえたうえで図や写真の解釈を問うている。つまり、連続型テキストと非連続型テキストの情報の分析・解釈、思考・判断を問う問題である^(注2)。

ここで「連続型テキスト」と「非連続型テキスト」について今一度確認しておこう。「PISA 調査（読解力）に

関する資料（平成17年）」によると、「連続型テキスト」は「文と段落から構成された物語、解説、記述、議論、説得、指示、文章または記録など」であり、「非連続型テキスト」とは、「データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式など」のことである^(注3)。日常生活における情報手段では、図や表など「非連続型テキスト」が含まれている場合が多い。図や表から情報を取り出し、思考する能力は、日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成につながる。

さらにいえば、この新傾向の試験は、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）のB問題（主に活用）やPISA（経済協力開発機構 OECD）の「生徒の学習到達度調査」の大学入学者選抜版を意識したものである。そして新入試が「高大接続改革」に基づいた改革であり、それを受ける大学の使命が、グローバル化や人工知能（AI）の技術革新などによる社会の急速な変化に対応できる新たな価値を創造する能力をもった人材を育てることであるならば、大学における学びには「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」を育成する内容を意識しなければならないであろう。

大学全入時代の今、大学入学者全員が必ずしも高等学

* 福岡女子短期大学

**福岡女学院大学

校までの学力を十分に備えて入学するわけではない。そして、それは新入試時にもありうるであろう。現在、学生の学力不足や適応不全への対応、高校から大学へスムーズに対応するための教育として初年次教育がおこなわれている。しかし、小中高大連携を視点に国語科教育、文学教育を見てみると、小・中・高における系統的な学びを大学の教養教育・専門教育につなげていくことがじゅうぶん可能になるのではないかと考えられる。1998年、教育審議会が答申において「文学的な文章の詳細な読解に偏りがちだった指導の在り方を改める」と明言したが、それでもなお、文学作品を読むことを通してより豊かなものの見方や考え方を身につけることは、自分で物事を考える姿勢の基盤になると思われる。

先に挙げた大学入学者選抜テスト試行問題、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）のB問題（主に活用）やPISA（経済協力開発機構 OECD）の「生徒の学習到達度調査」で取り上げられる「非連続型テキスト」の読み取り、あるいはそれと「連続型テキスト」とを関連付けて読むことは、しばしば評論文の「文章」と「図表」で問われるが、たとえば文学教材における「文章」と「挿絵」の関係も同じように関連付けることができるのではないだろうか。

桐生直代は、今年度（2018年度 平成30年度）、福岡女子短期大学開講科目「作品研究」で樋口一葉の『十三夜』を取り上げている。そのなかで、挿絵の効果、映画との比較など、「文字テキスト」と「映像テキスト」との関係についての授業を実践した。従来、国語科教育では「挿絵」を用いた読解指導が行われており、指導事案や効果についての報告が多々なされている。そこで、拙稿では短期大学で行った小説と挿絵の相関を〈読む〉授業を、異なる教育課程のつながりから捉え直し、「挿絵」を用いた読解指導として提案をする。

2 「非連続型テキスト」としての「挿絵」

「挿絵」とは、『日本国語大辞典 第2版』によると、「新聞・雑誌・書物などの文中に添えた絵。挿画」である。ちなみに「絵」は「物や考えを形や色などで平面上にかきあらわしたもの」、「図表」は「点や線で形や位置を示したもの」である^(注4)。

「非連続型テキスト」とは、「データを視覚的に表現した図・グラフ、表・マトリクス、技術的な説明などの図、地図、書式など」とある。「連続型テキスト」とは、「文と段落から構成され、物語、解説、記述、議論・説得、指示、文章または記録などに分類できる」ものである。実は、「PISA 調査（読解力）に関する資料（平成17年）」による「非連続型テキスト」の説明には「絵画」「挿絵」は含まれていない。また、挿絵を「非連続テキスト」と明記したものも管見には見られなかった。しかし、「連続型テキスト」の定義に「物語」が含まれる以上、文中に添えた挿画、挿絵は、「非連続型テキスト」として扱っ

てよいだろう。

また、佐藤幸江、中川一史氏は、挿絵や写真などを「読解力と言う非連続型テキストを含めた映像メディア」として扱われている^(注5)。両氏は高度情報化社会における映像メディアの情報の機能、内容と表現に関する指導に注目され、「映像を見る力や映像と言葉を関連化させて言語の力を育成することが、これからの国語科教育として喫緊の課題になると考え」られている。

3 挿絵を用いた読解指導 先行研究

子どもを対象とした挿絵の影響を論じた先行研究については、田中麻巳氏の論文に詳しい^(注6)。田中氏によると、先行研究では理解度・創造性（イメージ形成）・関心度の観点から論じたものが多いという。そして、子どもにとって挿絵があるほうが理解率が高く、イメージ形成に挿絵の影響を受け、挿絵によってテキストへの興味に差異が生じることがあるとまとめられ、そのうえで、大人（18歳以上）の読書においても挿絵が有効であることを論じられている。

挿絵の活用について窪田祐樹氏は、物語絵を用いた『伊勢物語』（高等学校「国語総合」）の授業を提案され、「挿絵を活用することで生徒が自分たちの力で原文を解釈するきっかけを与えることができ、そこから生徒は豊かな作品像を獲得することができる」と述べられている。挿絵の役割は「本文読解の補助」だけではなく、「生徒に多義的に読むことの可能性に気付かせ、さらに生徒が納得のいく読みを主体的に導くことができるようになり」、「挿絵を契機に本文読解を行うことによって生徒は古典を多義的に読むことのできる可能性に気付くことができる」という^(注7)。

また、林直紀氏は、「絵画化された「芥川」を比較分析し、批評文を書く」という授業を実践された。「絵画から得られた情報を基に、本文に立ち向かわせるきっかけとすることが可能である」との教材観・指導観を提示され、学習内容に「男が女を連れて逃げる場面の絵の違いを読み解くことを通じて、古典の文章の読みを深める学習であったことを振り返る」活動を入れ、「絵の違いは読みの違いであり、それに気付くことも読みの深まりであることを確認する」指導をされている^(注8)。

窪田氏の挿絵の活用は、とすれば教師の現代語訳を絶対視することのみ陥る古文学習からの脱却をはかるものであり、挿絵の役割が「本文読解の補助」だけではない、ひとつのテキストであることを示した授業である。また、林氏の授業は、PISA型読解力における「情報の取り出し」、それに加えての「解釈」「熟考・評価」「論述」を含むものと捉えられるものである。

平岡雅美氏は、挿絵の活用について次のように提言されている^(注9)。

児童生徒の日常生活のすべてがメディアの影響を受けている中であって、画像や映像、音声を活用

しないで学習者の興味関心を喚起することは年々困難になっている。(略) そうした児童の実態に対応するためにも、国語教材、特に物語文教材における挿絵の機能は重要視されるべきであると考え。そこで問題になるのが、どの程度まで挿絵を活用して読解を進めるかという点である。(略) どの挿絵を活用していくか、言い換えればどんな挿絵が掲載された教材を学習者に提供していくか、そうした問題はすべて指導者である国語科教師に任されているのが現状である。

先にあげた窪田氏、林氏の授業において、挿絵は授業者が選択し、教材化されたものであるが、教科書の挿絵はすでにそこにあるものとして学習の対象になる。つまり、教科書に存在する「挿絵」には編纂者の意図が含まれていることを、指導者は看過してはなるまい。教科書の「挿絵」が教材の「読み」に深く関わるものである以上、指導者はその取り扱いを意識的に行うべきであろう。

4 大学文学教育における「挿絵」

河野龍也、佐藤淳一、古川裕佳、山根龍一、山本良編著による『大学生のための文学トレーニング近代編』^(注10)は、「文学理論を応用し、近代文学を楽しく学ぶ」「研究的に読むための基本的な意識について学ぶことを目標」とし、「文学理論の基礎概念」、「歴史のコンテキスト」、「活字の外側へ」と3つのセクションから成るテキストである。「活字の外側へ」では、谷崎潤一郎『蓼喰ふ虫』を取り上げ、「文章」と「挿絵」の相関を読み取りが設定されている。その解説の要点をまとめると次のようになる。

- (1) 読むという行為が、「自分たちが意識するよりも多くの感覚を働かせた営みであり、複数の経路で伝達される感覚情報を組み合わせることで受け止める、マルチモーダルな営み」であること。
- (2) 挿絵のある書籍は、異なる伝達方法を有する複数の表現主体による共同制作の産物であり、「蓼喰ふ虫」はその成功例であるが、そうでないものもある(山田美妙「胡蝶」)。創作者にとっては、本文(文字テキスト)と挿絵(絵画テキスト)の調和が課題である。
- (3) 「挿絵が何をどのように表現しようとしているのかが確認できれば、その観点から改めて小説の本文の表現の固有性を浮かび上がらせることもでき」「自分自身の読みの感度を上げることにもつながる」。「挿絵と小説の本文の微細な違いを意識することは両者が渾然一体となって伝える魅力をよりよく受け止めることでもある」。

小説と挿絵の関係についての研究は枚挙に暇がないが、たとえば諸岡知徳氏は、新聞小説とその挿絵を扱う立場から、「挿絵を読むという行為のなかには同時代の読者たちのアクチュアリティという問題があるのではな

かろうか」と問題提起されている^(注11)。また、高槻侑吾氏は、小説「坊ちゃん」の絵画的受容の分析をとおして、「挿絵」を「小説世界の外部に向けられた〈可視化への欲望〉」と虚構世界を現実世界に再現し、追体験とともに一体化しようとする〈内面化された可視化への欲望〉と結論付けられている^(注12)。

このように、近代文学研究における挿絵と本文の読みについては、様々な研究がされていると同時に、「研究的に読む」一つの基本的な方法として提示されている。しかしながら、国語科教育における挿絵の問題、「連続型テキスト」と「非連続型テキスト」の読み取りの学習を振り返ってみると、実は小・中・高での「挿絵」の読み取り(「連続型テキスト」と「非連続型テキスト」の読み取り)は、「研究的に読む」トレーニングの土台になっていることが見えてくる。そしてそれは、「非連続型テキスト」に意識的になるという点において、文学的教材だけではなく論説文教材においても同様のことが言えるであろう。このように「挿絵」(「非連続型テキスト」)を視座に入れたとき、小中高大を貫く系統的・連続的な学びの可能性を見出すことができよう。

5 表現視点をどこに置くか

さて、今まで「挿絵」を読むことについて述べてきたが、ここまでは「挿絵」を作品と不可分に結びつけているもの、挿絵ありきを前提としてきた。先にあげた『大学生のための文学トレーニング』においても同様の立場だと考えてよいだろう。

挿絵と小説本文を比較する際に有効な視座として考えられるのは、それぞれにおいてどのような表現の視点がとられているかということでしょう。(中略) 小説表現においては、その表現主体がどのような立場からどのような視点で語っているのかということが確認できます。絵画表現においても、その表現主体の立場や視線を確認することができるはずですが。その視線が物語世界の何処に位置づけられたものなのか、作中人物の視点と同化しているのかいないのかといったことを確かめていくと、自ずと挿絵に固有の視線が見えてくるはず^(注13)。

たしかに、「挿絵」が本文との調和を目指したものであり、小説本体がその融合である以上、まずはそこに描かれた「挿絵」に注目するのは必然であろう。また、絵本やライトノベルに慣れ親しんでいる学生にとっては、「挿絵」はあってしかるべきものではなかろうか。そういう意味で『大学生のための文学トレーニング』の「文章と挿絵を対照させてそれぞれが示す物語の内容を比較することで、文章と挿絵の表現視点の違いを確認する」トレーニングは、基本的かつ有効な設問である。そこで、それを踏まえたくて、「小説本文を読み、自分ならどの場面を挿絵にするか」という問いかけをした。実際の「挿絵」がどの場面を選択しているかを確認することで、

自分の視点と「挿絵」の視点の位置について考察する活動である。もちろん、正解・不正解を付けるものではない。実際の「挿絵」が正解という問いではなく、表現視点をどこに置くかで表現効果や文章との調和について意識的になることを目指した。これもまた、主体的かつ多義的に読むひとつの方法だと考えられる。

そこで、桐生がおこなった、小説と挿絵の相関を〈読む〉授業の一例を報告してみたい。

6 授業実践報告

(1) 授業内容と学生観

平成30年度前期、福岡女子短期大学開講科目「作品研究」において、樋口一葉の『十三夜』を取り上げた。受講者は文化教養学科2年生。専門選択科目であり、29名の受講であった。文化教養学科では司書・学校司書・司書教諭の資格が取得できることもあり、多くの学生が司書課程を履修している。また、中学校国語科の教職免許も取ることができ、今年度は6名の学生が教職課程を履修している。総じて読書を好み、本に親しむ姿勢を持ち、本に関する専門的な知識を積極的に学ぶ学生が多い。しかしながら、学生の読書志向として目立つのはライトノベルやゲーム、マンガ、アニメなどであり、近現代文学に関しては読書経験が少ない傾向が見られた。そこで、同期開講必修科目「近代文学」では、『大学生のための文学トレーニング近代編』を使い、文学理論を用いた読みの授業を行った。そして、「作品研究」においては、樋口一葉をとりあげ、作家論や作品論からのアプローチを行った。そして、『十三夜』の講読の後、挿絵の効果、映画との比較など、「文字テキスト」と「映像テキスト」との関係についての授業をおこなった。

(2) 『十三夜』初出と使用テキスト

樋口一葉の『十三夜』は、初出が明治28（1895）年1月、「文藝倶楽部」別冊「閨秀小説」に掲載された。授業では読みやすさと脚注を優先させ、新潮社文庫版（1999年）を用いた。

(3) 『十三夜』の一般的批評

次に、『樋口一葉全集』より、鑑賞文を読んでみよう(注14)。

一葉の全作品中でも最も完成度の高い小説である。それは何よりも構成の確かさに負っているわけで、芝居的一幕二場に相当する場面設定は実に堅固だといわなければならない。「上」における、人間は自分一人で生きているわけではないとする父親の論理が「下」の録之助の登場で実証されていくといった構成の緊密さはこの小説以外には見出せないのである。こうした構成の中に一葉は家という社会的メカニズムがもたらす悲劇を一身に背負った女を初め

て造形して見せた。妻であり母である女がそうした「性」を抱えて社会的にどう生きるべきかをきまやかに描き出したのである。お関はけっして挫折したわけではない。あくまでも関係の中で生きる一つの道を主体的に選択したのである。もちろん、その生は重く悲しい。だが、社会で、そして人間関係の中で生きるとはそうしたことでしかありえないのではないか。そうした一葉の嘆息が聞こえてくるような情感に満ちたラストシーンである。（下線部は筆者による。以下同じ。）

(4) 授業の進め方

授業においては、下線部の読み取りを中心におこなった。学習内容・指導内容については次のとおりである。

- 1 本文通読後、初読の感想を書く
- 2 「上」読解 お関の言い分を中心に（精神的なドメスティックバイオレンスについて）
- 3 「上」読解 父親と母親の考えの違い（家父長制度・女子教育等、時代背景について）
- 4 「下」読解 録之助の生き方
- 5 「下」読解 合わせ鏡としてのお関と録之助、加害者としてのお関
- 6 「下」読解 十三夜が照らし出すもの *挿絵を描く
- 7 『十三夜』映画視聴
- 8 映画、挿絵から読み取れること

(5) 問いかけ

『十三夜』に挿絵を付けるとしたら、どの場面を選びますか。書ける人は絵も描いてみましょう。」

(6) 学生の解答 ただし、「上」「下」どちらかの場合もある

「上」

〈冒頭の場面〉 ・は学生の記述



- ・ 斎藤家から原田の家に帰る場面
- ・ お関が実家の門に来た場面
- ・ 最初のシーンのお関が格子にぶつかる前の場面
- ・ 父と母の会話している場面

まず、冒頭の場面を選んでいる学生が三分一いた。図1のように、格子や門を描き、その前で沈むお関を描いているものが他にもあった。以下、冒頭部分をあげる。

あの相手は定めし母様。ああ何も御存じなしに、あのよう喜んでお出遊ばすものを、どの顔さげて離縁状もろうて下されと言われたものか。叱られるは必定、太郎と言う子もある身にて、置いて駆け出して来るまでには、種々思案もし尽しての後なれど、今更にお老人を驚かして、これまでの喜びを水の泡にさせますことつらや。いっそ話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言われて、何時何時までも原田の奥様、ご両親に奉任の聲がある身と自慢させ、(略)思うままを通して離縁とならば、太郎には継母の憂き目を見せ、ご両親には今までの自慢の鼻、にわかに低くさせまして、人の思わく、弟の行末、ああ、好み一つの心から出世の真も止めずはならず。戻ろうか、戻ろうか、あの鬼のような我良人のもとに戻ろうか、あの鬼の、鬼の良人のもとへ、ええ厭厭」と身をふるわす途端、よろよろとして、思わず格子にがたりと音さすれば、(略)

〈両親との場面〉

- ・ 両親に離縁したいと打ち明けるシーン
- ・ 父がお関を説得する場面
- ・ 父がお関をなだめ、母は泣いているシーン
- ・ 父にさとされているシーン (太郎という子があるのに)

ここは、両親とお関が同席する場面であるが、挿絵を描いた学生はいなかった。しかし、学生の回答からは、誰を中心に据えているかがわかる。誰を主語にするか、つまり視線の方向がポイントになってくるとされる。そのまなざしがお関に向けられるか、父親、母親に向け

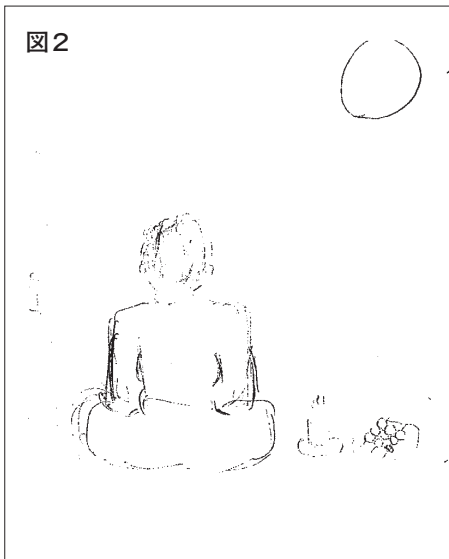


図2

られるか、または鳥瞰したものになるかによって、視点はより明確になるであろう。ほかに図2のように、「父親の姿(父親の姿をかくことで、お関のことをどう思っているか具体的に読み取れると思ったから)」とお関が帰った後の父親の姿を選び、描いたものもあった。これは本文と挿絵の二重のテキストから父親の心情を読み取ることを要求するものである。どこまで意識的に描いたのか、筆者は学生に聞く機会を失したが、作画することで、学生も本文テキストに関わる創作者になることに気付かせ、作画創作者の意図について考えさせることもできる。

〈夫との結婚のきっかけ〉

- ・ お関が羽子板をしている場面。原田は車に乗っている。
 - ・ 初めて原田と出会い、原田がお関に一目ぼれする場面
 - ・ 原田がお関と両親に結婚をアプローチする場面
- #### 〈夫との結婚生活〉
- ・ 原田に衣類を用意するが着てもらえないシーン
 - ・ 付け加えるならはらだがおせきに冷たくあしらっているシーン。ここから始まると思うし、その印象がないと感情移入しにくいなと感じました。

〈夫との結婚のきっかけ〉、〈夫との結婚生活〉については、下線部の意見に注目したい。挿絵をお関の苦しみや悲しみ、離縁の覚悟に共感するためのツールとしている。ともすれば、画像は文字情報よりも印象が強く、イメージを喚起する。そのような挿絵の効果を考えさせる選択と理由といえよう。

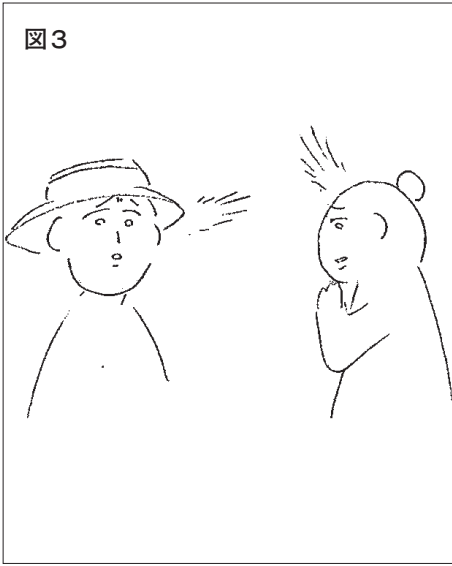
「下」

「下」については、下記の結果となった。

〈お互いに気づく前〉

- ・ 録之助の車にお関が乗っている場面
- #### 〈再会〉
- ・ 録之助とお関がお互いに気づくシーン
 - ・ 録之助とお関の再開シーン
 - ・ 録さんとの再会シーン
- #### 再開のシーン
- #### 〈二人の語り〉
- ・ お関と録之助が並んで歩くシーン
 - ・ 二人で歩いている時
 - ・ 録之助とお関が十三夜(月)の下で、昔の事、現在の事をお互いに語っている様子。
- #### 〈別れ〉
- ・ お関が録之助にお金を渡すシーン
 - ・ 最後、別々に帰っていくシーン
 - ・ 録之助との別れの場面

たとえば図3は、「お関」と「録之助」がお互いに気づく場面をドラマチックにとらえている(図3)。また、別れの場面については、図4のように別々の方向に向かう描き方は本文の「其人は東へ、此人は南へ」を踏まえての作画だと思われる(ただし方位が違う)。ほかに、



「月明りと雲の流れ」と書いた学生もいた。人物ではなく、十三夜という情景を選んだところにこの学生なりの視点が表れている。ここもまた、他人の物の見方や考え方を多様性を尊重することにつなげることができるであろう。図5は録之助の車にお関が乗っている場面であるが、月が満月になっていることに注視したい。

これは「十三夜の月」についての理解と表現が一致していないという点で、理解の不十分さが表れている例である。また、「お関」と「録之助」が笑顔で歩いている場面を描いたものもあった(図6)。たしかに、「お関」が車から降り、2人で歩く場面は、「お関」が「録之助」に寄り添おうとしたことの表れと読み取ることができるが、この笑顔の表情は本文内容とは調和していない。このように、作画させることで学生の理解をはかることができる。言葉に注目し、精密に読み取り、自分のイメー

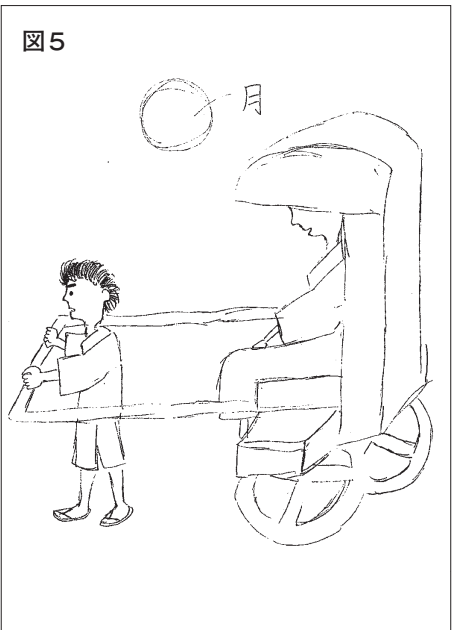
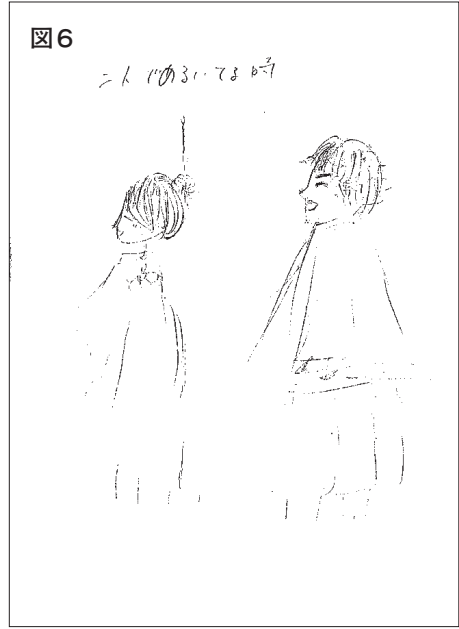
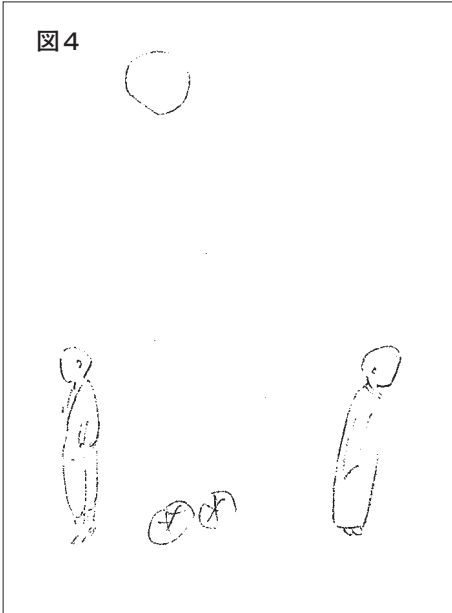


図7



ジに流されることのない読みの指導が必要であることがわかった。

(7) 初出雑誌における挿絵

それでは『十三夜』の挿絵はどの場面が描かれているのか、初出雑誌『文藝倶楽部』別冊「閨秀小説」を影印復刻した『樋口一葉集』を用いて挿絵を紹介した。管見によれば、挿絵が描かれているテキストはこれと電子書籍「オリオンブックス」の表紙のみである^(注15)。

「上」の挿絵は図7、「下」の挿絵は図8。坂下絵は武内桂舟の女弟子玉桂中江ときの作である。「上」の場面は、お関と息子である太郎の別れの情景である。頭注には、時計が十時をさす不自然さについての指摘がある。お関の鬢や机、時計に明らかにつきめがあることから、「坂下絵を桜の板に貼って火でかわかし、二つに割って分担してほりあげたものである」という。「急ぎの仕事であった筈で、八三頁の「モウ程なく十時になる」にひきつけられた間違いであろう」と推測されている^(注16)。

実は、挿絵に該当する場面は、お関の語りの中のみである。語り手の語りにはお関と太郎の場面は出てこない。該当する箇所を上げてみよう。

①

「(略) 太郎さんは何時も悪戯をしていますか。なぜに今夜は連れてお出でない、お祖父さんも恋りがってお出でなされたものを」と言われて、また今更にうら悲しく、

「連れて来ようと思いましたが、あの子は宵までいでもう疾くうに寝ましたから、そのまま置いて参りました。本当に悪戯ばかりつりまして、聞き分けとは少しもなく、外へ出れば跡を追いまするし、家内にいれば私の傍ばかり覗うて、ほんにほんに手が懸ってなりませぬ。なぜあんなでござり

ましよう」

と言いかけて思い出しの涙、むねの中に漲るように、「思い切って置いては来たけれど、今頃は目を覚まして、母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、煎餅やおこしの哆しも利かで、皆々手を引いて鬼に喰わすと威かしてでもいよう、ああ可愛そうなことを」と声たてても泣きたきを

②

「私は今宵限り、原田へ帰らぬ決心で出て参ったのでござりまする。勇が許して参ったのではなく、あの子を寝かして、太郎を寝かしつけて、もうあの顔を見ぬ決心で出て参りました。まだ私の手より外、誰の守でも承知せぬほどのあの子を、欺して寝かして夢の中に、私は鬼になって出て参りました。(略) どうぞお願いでございます、離縁の状を取って下され。(略)」

③

「(略) あの子の顔を見ぬ決心で出て参りました。置いて来るほどの心になりましたからは、もうどうでも勇の傍にいることはできません。親はなくとも子は育つと言いまするし、私のような不運な母の手で育つより、継母御なり、御手かけなり、気に適うた人に育てて貰うたら、少しは父御も可愛がって、後々あの子の為にもなりましょう。私はもう今宵かぎりどうしても帰ることは致しませぬ」とて、断つても断てぬ子の可憐さに、奇麗に言えども詞はふるえぬ。

①、②の下線部にあるように、太郎はまだ手のかかる母親に甘えている子どもだということが何度も語られている。家では母親のお関の後を追ひ、「私の手よりほか、誰の守でも承知しない」という。そのような太郎「寝かしつけて」置いてきたことも三度、繰り返される。「欺して寝かして夢の中に、私は鬼になって出て参りました。」と涙とともに語るお関の悲しみは、だからこそ離縁の決意を引き立たせるのである。夫のひどい仕打ちでもなく、両親との話し合いの場でもなく、お関の口から語られる太郎への思いと家出の状況は、母というイメージを挿絵の後ろ姿と相まって読者を想像の世界に引き込む。

〈学生の反応〉

- ・ 太郎を寝かしつけているお関が泣いている様子が見て取れて、小説だけ読んでみると、ただ寝かしつけて斎藤の家に帰っているだけだと思っていたので、息子との別れを惜しむ母親のシーンに見えました。
- ・ 親子の場面で太郎は大体真ん中を向き、お関は背を向けて泣いている。ここから太郎は母がいなくなるなど思っておらず普段と変わらない安心した表情で眠っている。対してお関は背中で悲しさ寂しさを表現している。2人の感情の対比が1枚の絵におさまっているよう

に感じた。

- ・太郎との挿絵「顔を見せないことで背中を感じ取らせるようなあどけない太郎の表情を見せている所も今からおいていくお関の気持ちにこちらがなれる」というか、そんな効果もあると思います。
- ・古風な感じでとてもいいなと思いました。太郎が寝ている挿絵で時計の針のいちが違うっていうところがびっくりです。
- ・太郎の外見は眠っている表情なども含め予想通りだったが、寝場所がテーブルの近くなのは予想外だった。
- ・部屋の内装が良かった（和風の部屋に洋風の置物）
- ・太郎の方の挿絵は、部屋が豪華だという印象。それと、そんなに机のそばで寝なくて良いのと思う。お関は太郎の寝顔を見て泣いているが、泣くほど離れがたくても行くのは耐えられないほどの辛さが表れていると思う。
- ・太郎へのお関の愛情のようなものが見てとれるシーンだと思います。顔は見えませんが、きっと我が子の寝顔を見て泣いているのかもしれないなと思いました。
- ・お関の「母であること」を考えているように思える。太郎の生長を喜んでいるが、まだわかる年頃でもなく悲しい背中。
- ・お関が太郎を思って泣いている。太郎はそんなことも知らず安心しきって眠っているという印象です。
- ・お関の顔が後ろ向きなことは色んな想像力が働いて非常に効果的だと思いました。
- ・文章だけだとあまり感じなかったのですが、挿絵を通してお関が太郎を大切に思い育てているように思えました。

授業では構図などに注目して読むことを指導したが、それをふまえ、挿絵が想像力を喚起するもの、読みを補助する役割も担うことに気付いているコメントが多くみられた。また、「お関の気持ちにこちらがなれる」というコメントは、表現主体の視線と読者の視線の重ねを指摘したものである。このような気付きから、語り手の視点を意識させる読みに発展させることも可能であろう。

次のコメントは、挿絵を自分なりに解釈したものである。

- ・私は太郎とおせきの挿絵について、涙を流しているのは悲しいからなのか、ざんげなのか、屈した（ママ）悔しさからなのか解釈がむずかしい。それよりも（時間からかもしれないが）この涙は家に帰ってきてから涙しているものと考えたほうが納得する。小説にもない場面だが、太郎の安らかに眠っている表情を見れば、逆に出るときおせきは安心するんじゃないかと思う。もう会わない太郎の最後の表情が健やかだったら私がいなくても大丈夫と思うのではないだろうか。この挿

絵には違和感しかない。

涙の意味について考え、より本文（内容）に合う箇所についても述べている。ただしこの意見は、本文の「涙を流す」という語りを見落としている。逆に言えば、挿絵が本文とどのように合致しているかを丁寧に見ていくことでこの問題は解決する。ことばを取りこぼすことなく読むという、指導者と学習者の課題がここから見えてくる。さらに、挿絵がなぜその箇所に置かれているのかという基本的なテキストの生成についての理解も必要であることがわかった。

そして、

- ・挿絵によって作品の根幹が変わってしまう気がする。

というコメントからは、その学生が何を作品の「根幹」としているのかを問うことで、自らの読みを客観視し、テキスト間の差異を受容することによる読みの深化を体験させることができよう。

「下」

「下」は録之助とお関と録之助が再会した情景。録之助は手に手ぬぐいをまきつけ、長提灯をさげている。「下」については、下記に挙げる本文の場面にそったものとして理解してよいだろう。

「御免なさいまし、もうどうでも厭になったのですから」

とて提燈を持ちしまま、不図脇へのがれて、

「(略)ではお乗せ申しませう。」とて悪者らしくもなく提燈を持ちかゆるに、

「あれ、お前さんはあのお方ではないか、私をよもお忘れはなさるまい」

と車より滑るように下りてつくづく打ちまもれば「貴嬢は斎藤の阿関さん。面目もない、こんな姿で。背後に目がなければ何の気もつかずにいました。それでも音声にも心づくべきはずなのに、私は余程の鈍になりました」

と下を向いて身を恥じれば、阿関は頭の先よりつま先まで眺めて

〈挿絵を見た学生の反応〉

学生の反応は、「録之助」についてのものが多かった。下の下線部からは、学生が受けた印象の違いがはっきりと見えた。なぜ自分の想像と違ったのか／あっていたのか、自分の想像はどのようなものだったのかを深めさせることで、自己を客観的にとらえ、そのうえで多様性を認める態度を育むことができたと考えられる。

- ・録之助の髪型が結構ボサボサしていて、自分の想像と全然違いました。

- ・ろくさんがちょっとしょんぼりしている。
- ・録之助が弱々しく自信を失っている。
- ・録之助との再会シーン幼馴染とは思えない様な雰囲気。母と息子に見える（パッと見）
- ・再開というよりもマダムに若造がしかられている絵に見えました。録之助の髪がふさふさでみすぼらしい感はないです。
- ・録之助は私はみすぼらしく感じたので、もう少しかっこよく描いてあげて欲しかったと思いました。
- ・ピッタリだと思いました。録之助がお関を見てなさげなく思っている様子が伝わってきました。

次にあげるのは、構図に注目したものである。二人の構図や色彩、服装について言及し、心情や身分の差を読み取っていた。下記下線部は構図の分析と解釈、批評ができていた感想であるが、模範として取り上げ、表現が不十分な学生（例「悲しい切ない印象を受けました」）への指導に活用することもできる。

- ・太郎とろくさんの再開のシーンの二つがさし絵になっていたのは、お関の心情が物語にとって大事なシーンだったからだろう。
- ・お関と録の対比一光と影ではないですけど、わかりやすく身分の違いのようなものを現していると思います。
- ・お関と録之助は2人共立っていて、対等な場面のように思われる。しかしお関はななめ下を向き、録之助は真下を向いていて身分の差を感じた。
- ・お関と録之助のほうは、お関の身なりが良い分、録之助のみすぼらしさが表れている。身分の差と録之助の弱気な感じ？がよく分かる。
- ・背景も月明かり（白）のみで二人の関係を“影”で表しているような黒色が大部分を占めるなど、少なからず差異がある。
- ・お関の着物が録之助と比べて一目瞭然で高く高価なのが分かる。
- ・身分の差がわかる。子の挿絵では録之助は小心者に見える。お関が意外と身長が高い。
- ・2人の立ちすがたがとても対照的だと思いました。昔は同じような立場にいたのに時が経って再会したときにこうも違うというのは、とても悲しいなと思いました。

先にあげた学生の挿絵では、お互いの顔に気づくというものが多かった。この挿絵も再会シーンではあるが、上の学生のコメントからは、お互いがある存在に気づいた瞬間ではなく、対比からふたりの現状を読み取ったことがわかる。つまり、挿絵が読み手に伝えようとした情報をその表現効果から受容するという挿絵の機能に気づくことができたのである。この後本文では録之助の放蕩と転落が彼の口から語られることになるのであるが、そ

の帰結としての彼の現状が「みすぼらしい」姿として示されるのである。

7 まとめと展望

「挿絵」から情報を読み取ること、挿絵の視点から何をどのように表現しているのかをとらえることをとおして、自分自身の考えをあきらかにし、それがどこに立脚するのかを自覚することができる。また、他者と共有することで共通理解あるいは多様性に気づくことができる。そして、本文（文字テキスト）と挿絵（絵画テキスト）の調和や差異を意識することでテキストの批評を行うことができる。これら一連の〈読む〉ことは、PISA 型読解力の「情報の取り出し」「解釈」、「熟考・評価」、「批評」を、「連続型テキスト」と「非連続型テキスト」との関連から読むことに相当するといつてよいであろう。ここから、小中高大接続を視野に入れた読解力指導の構想を立てることができる。

たしかに、日本語・日本文学関係以外の大学生に文学教育をおこなうことはむずかしくもあるだろう。また、文学的文章ではなく説明的文章で読解表現力を育てたほうがよいという考え方もあるかもしれない。また、拙稿では、国語科における文学教育と大学における教養教育との関連や位置づけなどが不十分であり、素材として文学を用いただけにすぎないところも否めない。しかし、文学の持つ言葉の力、たとえばイメージを生み出す言葉を味わい、感じ取り、論理的に伝えていくことは、論理的な意味での言葉の力と感性という意味での言葉の力をつけることになるであろう。文学を感性のみで甘受するのではなく、読みの方法を用いることで論理的に読み、そして表現する。小中高での文学教育を、大学はどのように接続していくか、今後の課題としたい。

注

注1 問題、正解表、「問題のねらい、主に問いたい資質・能力及び小問正答率等」「作問のねらいとする主な『思考力・判断力・表現力』についてのイメージ等」については「独立行政法人 大学入試センター」(<https://www.dnc.ac.jp> 2018/11/12) 参照。

なお、平成30年度分については、平成30年11月10・11日に実施された。

注2 ただし、河合塾の分析では選択肢から容易に解くことができるとして不十分だと評価されている。河合塾「第4回(2018年) 高大接続改革シンポジウム 科目別レポート 国語」<https://www-kawai-kyuku.ac.jp> (2018/11/12)

注3 「PISA 調査(読解力)に関する資料(平成17年)」文部科学省 www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryoy/05122201/014/005.ht (2018/11/1)

注4 小学館、2000年。

注5 佐藤幸江 中川一史 「映像メディアの理解と表現に関する指導の系統性—小学校国語科平成4年度版教師用指導書の分析から—」『金沢星稜大学人間科学研究第10巻第2

号]、平成29年。

注6 田中麻巳「小説の読みに与える挿絵の影響」『読書科学』52 2009年。

注7 窪田祐樹「挿絵を活用した『伊勢物語』初段の読解指導」『横浜国大言語研究』横浜国立大学言語・日本語研究、2016年。

注8 林直紀「言語活動を通して読解力を高める指導－高等学校1年国語科『伊勢物語』「芥川」の実践を通して－」愛知県教育委員会 平成22年度教育研究調査事業「活用」を意識した授業改善と評価の在り方に関する研究報告書 No.3。

注9 平岡雅美「物語文教材における挿絵の機能と問題－ごんぎつねの挿絵比較と読解の差違」『全国大学国語教育学会発表要旨集』全国大学国語教育学会、2006年。

注10 三省堂、2014年。

注11 諸岡知徳「挿絵のなかの女性イメージ－1930年代新聞通俗小説の底流」『神戸山手短期大学紀要』神戸山手短期大学、2010年。

注12 高槻侑吾「可能態についての漱石テキスト：小説「坊ちゃん」の絵画的受容から」『九大日文』九州大学日本語文学会、2017年。

注13 注10に同じ。

注14 小学館、昭和54年。

注15 オリオンブックスは電子書籍出版社。インターネット上で見られる『十三夜』のカバーイラストは下し髪にしたお関が橋に佇み、それを月が照らしているものであるが、月が十三夜ではなく満月であること、着物等の時代考証がされていないことなど、ある意味現代における『十三夜』受容として興味深い問題をはらんでいる。授業では学生たちにこのイラストを見せ、文字テキストと絵画テキストとの関連から意見を言わせてうえて、このイラストの持つ問題提起について考えさせた。

注16 山本洋編 和泉書院、昭和61年。

付記 『十三夜』本文の引用は、授業プリントにしたがい『にぎりえ・たけくらべ』（新潮文庫、一九九四年）に拠った。なお、ルビは省略した。

テキスト・テキストの用語については、小説を生成する本文と挿絵の意味で使うときに「文字テキスト」・「絵画テキスト」を用いた。また、「非連続型テキスト」＝「絵画テキスト」として扱った。